

共同利用・共同研究に関わる各種お知らせ

共同研究専門委員会よりお知らせ

大学共同利用機関として共同利用は個々の研究活動と並んで分子科学研究所の基幹的な活動である。しかし2020年度はコロナ禍のために、その共同利用のアクティビティーは大きな打撃を受けた。そして本稿を執筆している2021年6月21日。広範囲で発出されていた緊急事態宣言は、まさに本日付で解除されたものの、コロナ禍の本質的な収束は残念ながら見えていない。特にここ数ヶ月間の緊急事態宣言によって国境どころか県境をまたぐ移動さえもが自粛要請され、分子研の施設・設備の共同利用にも大きな支障が出ている。

一方で、本年度の協力研究が5月末段階で35件採択されていることは、コロナ禍にあってもなお研究所内外の分子科学関連領域の研究者の熱意や探究心が意気軒昂であり、分子研への期待も従来に増して大きくなっていることの現れであろう。同様にナノプラットの利用（採択）も十分な件数が見て取れる。しかしながら実際に岡崎の地を訪れての共同利用には、やはりハードルが高く、今年度もコロナ禍対応の柔軟な共同利用の制度運用が求められている。

研究会に関しては従来のように岡崎に集まっての対面での発表・討論は全く実施不可能な状況であり、また各大学などでのリモート会議環境が整いつつある現状において、分子研研究会制度の利用に大きな優位性はなくなっている。しかし対面での個別議論や情報交換が持つ新たな共同研究や研究推進の揺籃の場としての価値は普遍的であると確信しており、その意味で共同利用における研究会制度はポスト・コロナにおいて、コロナ禍で損なってしまった研究ソサエティーに再び有機的活力を与える鍵となることを大いに期待している。

さてその苦境の中においても、筆者なりに分子科学研究所の共同利用のポテンシャルを俯瞰してみたい。これまで分子の構造・挙動・機能を解明する上で分光分析・測定は共同利用の大きな部分を担ってきた。実際に現在もUVSORでは汎用性のある先端利用を展開すべく弛まぬ検討努力がなされており、また高磁場核磁気共鳴分光においても国内の中核的共同利用設備を提供してきた。一方で、最近では先端的な顕微分析の開発、立ち上げも推進しつつあり、近い将来において幾つかの先端的顕微分析機器を共同利用に展開したいと考えている。また結晶スポンジ法によるX線構造解析など国際的にも類例のない共同利用は、近年における特筆すべき展開と断言できる。

ワクチンの普及もあり、ポスト・コロナ、ウィズ・コロナの日々も近づきつつある。協力研究や研究会で多くの関連領域研究者が岡崎の地を活発に行き来する日々が再び日常となることを祈ってやまない。

(魚住 泰広 記)

共同利用研究の実施状況（採択件数）について

種 別	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度 (5月31日現在)
課題研究	4	4	2	4	2	2	2
協力研究	62	82	73	45	37	53	35
自己資金による共同研究等*	253	318	361	347	357	447	-
協力研究（ナノプラット）	64	57	64	81	69	44	45
分子研研究会	11	7	9	10	7	4	0
若手研究活動支援	1	1	2	1	2	1	0
岡崎コンファレンス	1	3	0	1	2	0	0
計	396	472	511	489	476	551	82

(注1) *平成25年度以降、集計開始。令和3年度前期分は集計途中。

(注2) 通年課題は前期と後期の2期分として、1課題を2として年度計に表す。

(注3) 新型コロナウイルスの影響により研究期間を延長した前期課題は後期の件数に計上しない。

分子研研究会

開催日時	研究会名	提案代表者	参加人数
2021年3月11日～12日	錯体化学から始まる学術展開の可能性	松田 亮太郎 (名古屋大学 大学院工学研究科)	117名
2021年7月12日～13日	IMS-FHI Symposium "Emerging Techniques of Scanning Probe Microscopy"	熊谷 崇 (分子科学研究所)	346名

若手研究会等

開催日時	研究会名	提案代表者	参加人数
2021年2月8日～10日	第18回 ESR 夏の学校: ESR法の基礎・理論・生体応用	加藤 賢 (大阪市立大学 大学院理学研究科)	159名